
ねこ の おやこ

マイマイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこの おやこ

【Nコード】

N2674Z

【作者名】

マイマイ

【あらすじ】

街を駆け抜ける猫の親子が見たものは。満月の夜の、誰も知らない物語。

ぼくたちは知っている。

この街のことなら、なんだって。

通りのむこうの家のおじさんは、ぼくたちがちよつとのぞいただけでもすぐ怒る。

こわいこわい、おこりんぼう。

すぐその道沿いにある魚屋さんは、いつだってぼくたちにおいしいものをくれる。

とってもとっても、やさしいおばさん。

ひなたぼっこにはどこの屋根が最高か。雨のふる日はどこにいけば濡れずにずむか。

近道だってたくさん知ってる。

塀を飛び越え、みぞの淵を走り抜け、屋根をつたって、

ぼくたちはいつだって行きたい場所にたどりつく。

毎日毎日、この街のどこかで起きるいろんなことをながめながら、
ママときょうだいたちとみんなそろって気楽に暮らす。

あのうるさい人間たちは、ぼくたちのことを「ねこ」と呼ぶ。

夕方、いつもの散歩道。

ママが先頭をすいすいと走り、きょうだいたちが後をついていく。

もちろんぼくも。

ぼくは一番ちびだから、よくみぞに落ちこちたり、道に迷って置いていかれたりするけれど、

最後はいつもママがぼくを見つけて、口にくわえて走ってくれる。

赤い屋根のちいさなおうち。ここがぼくは大好きだ。

この家にはかわいい人間の女の子がすんでいる。

「まりちゃん」って呼ばれているのをよく聞くから、それがあの子

の名前かな。

まりちゃんは、ぼくたちが塀のすきまから顔をのぞかせると、
とってもうれしそうに目をきらきらさせて手を振ってくれる。

おおきな声もださないし、ときどきはおいしいものをくれることもある。

ママはあんまり人間に近づいてはいけませんって言うけれど。

すごくこわかったけど、あんまりまりちゃんが呼ぶものだから、

ぼくはまりちゃんのそばまで行ってみた。

まりちゃんは、かわいいね、かわいいねってぼくの頭をなでくれた。

ぼくはのどを鳴らしてうれしがってみせる。

まりちゃんはとってもよろこんだ。

そうして、ぼくに言ったんだ。

「おともだちに、なつてね」

ぼくはまりちゃんが大好きだ。

今日も通る、まりちゃんの家。

ママとみんなは、また先に行っちゃった。

ぼくはどうしてもまりちゃんに会いたくて、塀のすきまから顔を出す。

まりちゃんが、泣いている。

真っ赤な目をして、泣いている。

どうしたんだろう？ぼくがここにいることにも気がつかない。

まりちゃん、まりちゃん。

ぼくが声をあげてもこっちを見ない。なにがそんなに悲しいの？

ああ、ぼくのママが来ちゃったよ。

ぼくをくわえて連れて行く。ママ、待ってよ、まりちゃんが泣いているよ。

ほら、あんなに悲しそうにないているよ。

ママはぼくをくわえて塀の上にのぼる。

そうしてママは言う。

あの子はね、この家の本当のこどもじゃないらしいよ。

おとうさんもおかあさんも、毎日まりちゃんを叩いたり、蹴ったりしているんだ。

おまえは気がつかなかったのかい？

あの子の目は、いつだって泣きはらして真っ赤に染まっていたじゃないか。

ぼくはとってもかなしくなった。

まりちゃんはぼくのともだちなのに、ぼくはなんにもしてあげられない。

ママは人間とともだちになんて言えないって言うけれど、

でもぼくは、まりちゃんが大好きなんだもの。

今日もまた、ぼくはママのことを聞かずに赤い屋根の家にいる。

塀のすきまをくぐりぬけ、まりちゃんをさがして庭をすいすい駆け抜ける。

まりちゃん、まりちゃん。

どこにいるの？

ぼくは声をあげながら、庭の木をよじ登ったり、壁から屋根に上がったりしてみたけれど、

まりちゃんの姿がどこにも見えない。

うしろからぼくを追いかけてきたママがぼくを呼ぶ。

ママ、どうしたの？

ママはひょいと壁から2階の窓へジャンプした。

ぼくも真似してついていく。

2階の窓からなかをのぞくと、まりちゃんがいた。

おおきな男の人と、女の人に、まりちゃんは叩かれていた。

何度も何度も叩かれたのか、洋服がびりびりにやぶれてる。

まりちゃんのかわいい顔は赤く大きくはれている。

いつもぼくを呼んでくれるあの小さなくちから、赤いすじが流れている。

からだじゅうに変ないろのあざがある。

ぼくはとってもこわくなって、ママを見た。

ねえ、ママ。まりちゃんはどうなっちゃうの？

まりちゃんが大変なことになってるよ？

ママはぼくのかおをぺろぺろとなめながら、静かに言った。

もう今夜であの子はダメかもしれないね。

さあ、おまえももうこの家に来るのはやめるんだよ。

きっと、もうまりちゃんには会えないから。

そんなの、いやだよ。

まりちゃんは、ぼくのともだちなのに。

ぼくは思い切り窓ガラスをひっかいた。人間たちがこっちを見る。

ほんの一瞬、まりちゃんがぼくを見た。

くずれたような、赤い目で。

だいじょうぶ。きっとぼくが助けてあげる。

月夜の魔法で、助けてあげる。

ぼくはママにお願いをした。

ねこが生きているあいだに、たった一度だけつかえる、月夜の魔法。

今夜はちょうど、満月だ。

ねえ、ぼくはまりちゃんのために使いたいんだ。

ぼくはまりちゃんの、ともだちだから。

ママはとっても悲しい声で鳴いた。

きょうだいたちもみんなで鳴いた。

もちろんぼくも鳴いた。

さあ、みんなで行こう。まりちゃんのところへ。

いつもの塀をぐりぬけ、壁をつたって2階へのぼる。

いた。

夕方に見たのと、おなじ場所にそのまま、まりちゃんはいた。

まりちゃん、まりちゃん。

みんなといっしょに、窓ガラスを何度もひっかいた。

やっと、まりちゃんがぼくたちに気がついた。

「・・・ねこ・・・ちゃん・・・」

まりちゃんは、もう動くこともできないみたいだ。

でもだいじょうぶ。ぼくが替わってあげるから。

ぼくは最後に一声鳴いて、ママときょうだいたちにサヨナラをいった。

それから、白く輝くお月さまに向かって思い切りさけぶ。

お月さま。

ぼくのからだを、まりちゃんにあげてください。

ぼくがまりちゃんの痛みをぜんぶ、もらうから。

ぼくのからだと、ぼくのいのちを、まりちゃんに。

そして、お月さまから目もくらむような、まぶしい光が舞い降りる。

それはまるで銀色に光り輝く魔法の粉のように、ぼくたちをつつみこむ。

ぼくはいつのまにかまりちゃんの部屋の中にいた。

ああ、痛い、痛い。からだのあちこちが焼けるように痛い。

そして、ぼくだったはずの、あの窓のむこうのからだには、きっとまりちゃんがいる。

ねこたちは、大きく鳴いた。

お月さま。ありがとう。

まりちゃんはもう自由になれた。ぼくのママはたたいたりしないよ。

よかったね、まりちゃん。よかったね。

そして子猫の目の前に、永遠の暗闇が訪れる。

かわいそうな人間の子供には、ねことしての未来が開かれた。

満月の夜の、誰も知らない物語。

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2674z/>

ねこ の おやこ

2011年12月9日16時54分発行